救済の多様性　天理教④

天理大学国際学部教授
山田　政信　*Masanobu Yamada*

前号では、数多の聖人が信仰の対象となるフォークカトリシズムに慣れ親しんだ人々にとって、神への直接的な祈りは新しい祈りの様式だったということを確認した。それゆえ、天理教に入信し、「絶対的唯一神」としての「親神」にたいする信仰を獲得したことを、キリスト教的な宗教風土に照らして「プロテスタント化」と呼んでみた。本号では天理教独自の「一神教化」とはどのようなものか、そしてそれが教義的にどういう意味を持っているのか精査してみよう。前号に登場したアウシーナの語りを見てみよう。

> 正しい道というのは天理教なんです。それは生命の起源とか病気の原因とかを説明しているからです。３歳の子どもがどうして病気にならなければならないのかを教えてくれたんです。今その原因がわかるんです。それは心の過ちだったんです。責任は私にあるんです。というのも私が神様から離れていたからです。頭は神様のことです。私の子どもが二人とも頭を患っているのです。両方とも３歳のときに病気になったんです。神様が私を神様のそばに置いておきたいと私に伝えているんです。カトリックではそういうことを説明してくれませんでした。人間は自分自身の心の主人ですから、心の持ち方次第で自分のいんねんを変えることができるんです。神様は子どもたちの病気を通して私が正しい道を歩むように示されたんだと思います。

ここでは彼女が語る、「責任は私にあるんです」、「人間は自分自身の心の主人ですから心の持ち方次第で自分のいんねんを変えることができるんです」という語りに注目したい。それは、天理教における「一神教化」を考える上で極めて重要だからだ。というのも、プロテスタンティズムの誕生と照らし合わせた時、ここには「個の自覚」という問題が「いんねん」を介して導かれているからである。

ルターの免罪符批判に始まる宗教改革が近代ヨーロッパの礎の一つとなったことは言うに及ばないが、それはまさに「個の自覚」を促すものだった。彼はカトリック教会が説く、善行によって神の義が与えられるとする善行義認を批判し、信仰義認を説いた。それが「信仰のみ」という教えである。これによりプロテスタント教会では、カトリック教会にみられる教会建造物の華美な装飾や諸聖人への信仰、そして聖母マリアの聖性さえも否定することになる。「信仰のみ」とは換言すれば「神のみ」の信仰である。すなわちキリスト（救世主）としてのイエスに救いを求める信仰である。それが信者をして神の前に一人立つ近代的な「個」を自覚せしめたのである。ルターはまた聖職の位階制を否定して、キリストに従う者はすべて「祭司」だと主張する万人祭司主義を説いた。ヨーロッパにおける平等思想の先駆けである。

天理教における「個の自覚」はプロテスタンティズムとの比較においてどのように考えればいいのだろう。天理教においても、「個」はプロテスタンティズム同様、神の前に一人立つ「私」であることに違いはない。しかし、先にそれが「いんねん」を介して導かれると記したように、その「私」としての「個」は「いんねん」という過去と現在を結び、なおかつ未来へと繋がる線上に立っていることを理解すべきだろう。つまり、天理教における「個」とは時間軸を介したそれであり、「いんねん」という時間的蓄積（未然の時も含めて）が「個」を「個」たらしめているのである。ここでいう「個」とは過去と未来の「他者」によって成り立つ「個」を意味する。換言すれば、「私は私ならぬ私によって私である」のだ。

これに対して、プロテスタンティズムにおける「個」は、図らずもマックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で嘆いたように、結果として時間のみならず空間からも切り離される「孤」を志向するように思える。今日のポストモダン的文化状況を顧みた時、筆者としてはそうした思いを深くするのだが、この点に関してはさらなる検討を要する。

さて、天理教の「いんねん」という教えの原義は、人間創造の説話である「元の理」に求めることができる。「元の理」では、人間はドジョウを魂として等しく神によって創られ、人間創造の究極的な目的である「陽気ぐらし」を実践することができるとされる。泥の中から掬い上げても、そのツルツルとした肌に汚れが付いていないドジョウを、無垢なる者の象徴と理解してみよう。明るく勇んだ心で生活するという理想的な姿は、そのような人間を創造し守護している親神の「元のいんねん」がもたらすものと解釈される。

「元の理」では、親神はドジョウを食され、その心根を味わわれたのちに、人間の「たね」とされた。この「たね」としての魂は、親神自身のなかから分け出されたがゆえに、「分け霊（みたま）」として陽気ぐらしの性質（神性）を本来性として持っているともいわれる（松本　1983：24）。しかし、人間は創生以来、親神に与えられた「心の自由」によって勝手気ままな方向に進んできた。「私（自我）」は、神のはたらきそのものを開示するはずの本来的な「自己」を忘れ、「単なる欲望的自我（八木　2012：129）」へと変貌してきた。「私は私である」という自己理解は、実は「私ならぬ私」という「自己（神性）」を忘れさせるのである。ついでながら、筆者はこの「私ならぬ私」を霊的（≒時間的）および社会的（≒空間的）意味で用いたい。

人は誰しも系譜の根源に辿れば「罪なき人」だという天理教の人間観はキリスト教の性悪説と対峙する。アウシーナは、息子の病気の原因が自分の心の過ちにあると述懐しているが、だからといって自虐的に、あるいは悲観的になってはいない。それは、彼女の現状理解が「元のいんねん」に根差した人間観に支えられているからに他ならない。元カトリック信者のなかには、子供のころからカトリック教会に祀られたキリストの磔刑像を見せられて、人間は「罪人」だと教えられ、苦しんできたと語る者が少なくない。そうした人々にとって、天理教の人間観は「自己」による自律と罪からの解放を導いているのである。

【参考文献】

松本滋『陽気ぐらしへの道』道友社、1983 年
八木誠一『＜はたらく神＞の神学』岩波書店、2012 年